



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

JAPAN

今人千題發句集卷之二

梅室素芯校正

毛ノ典三郎



睦白
のじきうきのきあき睦白ト
ちよそな人よりき睦白れ
き角一の句一折厚の睦白ト
よ西を發て置ううち

桂 以

ち
縛

物をきる人のあ場やち縛
きよテ若のすみのち縛

木
縛山

よ傳

もノ鳥之部

山里やすむ社もまほは秋
以（い）がまほりあまてまの秋
庭之池や向よすすむ春後（うし）
暮秋のいやもと暮（く）一も（うろ
自（じ）うて暮（く）と暮（く）一暮（く）の秋

万
信
由
瑩
春
紀
用
舍

古キの序よあむせあみ

雅
春

虫干

絲よみてすのち干（かん）あく（く）
ち干（かん）や庭（にわ）へ入（い）るの候（とき）ら（く）
も（も）テや枯（か）れの爲（ため）又（また）
さ（さ）けの處（ところ）を庭（にわ）や山（さん）の向（むか）い
モテや落（おち）て（おち）て行（ゆ）く

東水
由
瑩
春
古
雅
春

木槿

木の傍（そば）で生（な）む木（き）木槿（ききん）ハ
木（き）木（き）を力（ちから）の開（ひら）き木槿（ききん）ハ
木（き）木（き）と名（な）ふ木（き）木（き）の木（き）木（き）ハ
木（き）木（き）てわ（わ）人の事（こと）も木（き）木（き）

左
外
京
耕
吉
唯
夕

もノ鳥之部

橋傍ハきよるの水一ももみけ

名居宿

一里也と本様足られハアリ

落丸宿

季^冬
餘子

嘗はてまつりあこひ

金櫻山客

つる先の家ねへつゝあひて不
幸なるまよ無くすこむをもふ

如意山宿

近火
宿し火や移向のあくし
高木にて人の近火保め行ま

外
不外
高古

庵見て外村のあくほん

芭た
迷宿

寺終了門を構す山谷より

迷宿

ねのまよつるわしもへ

迷宿

生ノ多ミ祁

麦筋

茅屋をうけて麦筋山宿丸

東亨

一休

宝喫

宝喫や屏風の内の一間
宝喫や時事通す、宝喫花
とおねむらうて喫茶のあ

梅家

幕文

梅家

ノノ喜之郎

福初

打ひりて拂つてや、福初
ひめいき大盆や、ひめいき
福初をまき草の香や

柏梅

獨

きう層も獨法のまゝぬ匂い小

柏山

居

姐板平底升のあくび芳獨傳外

高丸

掌や掌のよ怪我もえきりあ
得すのうしおもやけよ作る
うしおもやけよ作る
掌や掌を出で呼ふふ
掌や良きもとを自らす
うしおもやれて行ぬの手
掌の袖よ袖尽く一束す
掌葉持てうしおもす
うしおもや一里の引て二丈門
曉のうしおもゆきゆみ

小林銀獅 一兄楠周 一周
山室信 壱旭 外室助 具備

管

四

言や、身のまゝの如きを、
嫁の如き

斗
一

卷之三
寒
卷之三
寒

卷之三

卷之四

卷之三

卷之三

己
酉

五加末

甫
七

名の芽の向むきも

林うえや在り一月もまき林のや
木や多もとまつにまわて林不外
頃うやカニシカ林のうもゆえ
新屋ヨリまゐりやまうむうむ
時るゑ時一季一や林よ望
あをそふてまちあらむ念の宿
林管や水をきいたち危り也
粗粒めきるゝ膏きりや林のも
不丁合れハシム達者ある雲林ハ
更、（よ餘ハ所もすうれのを

由五個一盒二隻空種器。舊
之大松雜連丘陵秀泉。物

梅

自是今林のアリを爲せば
之の候やあるのをひかへ
雅楽の通じて嘗て紳の林
あると爲を捕やうあります
中よしの他、行戻や内と林
主の多めで打ましね等、少
少林や家をもる事一精
茶屋舎て鶴舎よ、行とも
舟見てくるや車をうきのえ
よ向、人の古つて林のま
まつり林のか家がわざ
学てゆれども見えぬや、其事あ

身向うや先枝に向ひてうち
向風を拂ひてゐるふきゆ中八
よりせや様よつてお食
自ら木の下に立
木あらじめ、いはけて自ら木
争ひれど木なるもの爲めに九
碌のうめやしりと牛の
人ありてはてておもめの毛
季。よめでて木のむ
來ねばよ一に木の木のむ
翁乃て牛の木の木の毛

年有鳥風吹樹葉已落高一
地矣乃於窗前角內而小憲

身を拘るつゝはる
能工の筆をもつてや角の柄
去らぬる人のよりよやうめのも
わくらむ人をまことなれ多柄外
一筋の身を柄へるや左度の内
來り身をもつて右の柄のまづの内
茎の内をねじて柄のまづの内
身をもつて右の柄のまづの内
柄をさへて身をもつて右の内
身をもつて右の柄のまづの内
身をもつて右の柄のまづの内
身をもつて右の柄のまづの内

且方學魯東坡以北山之詩
寒盡樓高唯空舍尊山靜

うのまえ部

30
四

帆船の内了めるお向八
先よ橋を往けるお向八
ゆふの事も往どきあつまふ
あくまくやおのの橋を達

早

暮

水丸

人行ふ金龜の屋や峰まよ
篠山出でるる江川も不
起居して落揚すらるる金龜は
猿巣を出るるうち毛毛

早池

丸

相馬

金龜

かき

の花

時鐘もあそぬおのむすび
経々のわのもくくしゐる角
わのむやうも向ひて喰され
うはをや柳をさう食の火
わのむやれてくねハれ
わのむよしうも浮ふる船の丸
わのむや半舟へてくふり

一茶 卓也 水竹
一茶 卓也 他 唐民

良捕

放毛鷹のあら房もや海もえ
海やりて船をまよひます

卷之三

久先をねや 稲近のすくらす
上りて墨のまし稻進ト
先よう特色の省いの字小
久是の特舟の多幸はれの川
門かようさるの舟ノサ
船のもよて居るや森の中

素妙一精神
風柳淺苔文雅

女
子

蒙
考

そはまへあわや、包み
くまくまや、舟の運びて向、
ま

和 無
風 氣

水

X

考をひて筆の身り本音

卷之三

四

たまつゝよ、浮きあがる。 庄
橋

西移松外之寓

学
村
羅
羅
村
學

周易
杜林注

置や向あよういはぬ
海り我らまぬせ候
うもねや向い候るれど
為むかくて候きく
まく候候船をばくて候
むの事一々まく候候船

東坡居士

卷之三

一
事
二
内
三
事
四
事
五
事
六
事
七
事
八
事
九
事
十
事

未
枯

蟹溪集

體
葉
之
少
少
十
手
一

桂
九

三毛

三毛年やうの者を烟の磚一毛
三毛年やうの者を煙の磚一毛

梅山

梅隊

多野ハタケキテツマニシ梅队
下多野ハタケキテツマニシ梅队

徐重鑄

梅队

多野ハタケキテツマニシ梅队
下多野ハタケキテツマニシ梅队

梅可耐

ノノモミヅク

梅大

多野ハタケキテツマニシ梅队
多野ハタケキテツマニシ梅队

蓬莱人

梅队

多野ハタケキテツマニシ梅队
多野ハタケキテツマニシ梅队

金澤人

梅队

多野ハタケキテツマニシ梅队
多野ハタケキテツマニシ梅队

成安

梅队

多野ハタケキテツマニシ梅队
多野ハタケキテツマニシ梅队

金澤人

卷之二

うしてからうの處へと來
た。一ツはてからうそで
ある例へまことに見
経やる事あつた。

行芳
修德

るゝゝ
御
レ
ル

の、事、御

卷三

山里や木の葉葉よ秋の季
風のくさすまや西冬の葉葉甚しき

卷之三

まことに
おのづか
のうき
のうき

九月廿八日
行在南京

۶۰

110

おまかせだ。おまかせだ。
おまかせだ。おまかせだ。
おまかせだ。おまかせだ。

青色よすきもまたやいりうね
うまのうのねりよだきもまた
のくまかまきの甲骨うふ水車

野蒜

卷之三

伊吾

お金や クロは 休きの物 し物
生池よ 休ひのかけや 休きの休
まの石や まの氣ののりよ つく
生氣の音や けの音の音よ ます 今
生の音の音の音 いも ト 桜木
桜木の音や ほよ 稲の 信と人
えの音の音の音の音の音

の い 事 事

丸巻のふじまに ま 月

月

國

あづくよ 月の月 や 旗りす
月よ 月の月 つままで 旗の月
月と月の月 くままで 月の月
まちの月よ くままで 月の月

桃 宮
桃 宮

渡宵

渡宵よ まめの まめの 月の月
渡宵よ 水をきく月を ほるよ
渡宵よ 丈のめくよ 月の月
まちの月よ くままで 月の月

大 植 宮
大 植 宮

見 雜 朝

一 月 月
良 捕 金
精 売

憾

ウナノヨリツモキニタニハア
ミ福者ノ市ニ申シテウリバ
ワヤクヒキシテシテ後ノ候ト
我家ヨリ既ニナリヤア男ノ子
作ウリ造ニ無念ノ憾ト
お一志テ家相シテルノリト

良捕
里麦
卓也
百毒
桂薰
祖友

ノノ秋ノ詩

シノヒト告ニ秋モ候セハヤ后ノ月
持ムモニホリマシ度也ハノセ
ニキモ本モ既ニナリヘノモニ月

合他
多金
財室

后
月

秋叶一ノふりよナリテ后ノ月
候持ハシムリケテリテ后ノ月
シノ秋既候ル舟頭やほの舟
候月ニシテ舟頭やほの舟
ねハシムリケテ后ノ月

一神
岩子
古
裕
吉

李鳥左次くわくわく空ナリ
川水の色ミテムニキナリ
空ナリ吹サセを歎ケル事
隣ノれと拂リ行くは事ナル
水ナリ吹ナリ芦のカ

一神
外
雅
元
外
嘉
義
古

野

は
離

路への嫁のねえやのものじる

芭丸
鉢自

のノキヌ祁喜影

れノ祁を入ル

シノキヌ祁

李や新年の中も山とま
李ハ春入てまく山とま

元日

廣重
万像
梅石

李や新年の中も山とま
李も春入てまく山とま

小帆
帆外觀

草薙

柳十葉の真も山とま
柳の子の山とま

柳童
童一

傀儡師

笛子の唐琴トランも山とま
笛子の子の山とま

素金
金匱物

管絃

管絃より風のりけくうるる春
ひづみハ風よりりくすくうるる
吹つてや拂ふさきぬ拂や) 桃衣
吹つてや拂ふさきぬ拂や) 天
うい枝よりの皺毛を新子外

大林
まき唯
一行柳

蒸姑

花のよてこそとおなず蒸姑(ア)

花のよてこそとおなず蒸姑(ア)
花のよてこそとおなず蒸姑(ア)

一休
茂木

蒸井

蒸井(ア)と音あわれの小しき
二之五物(ア)と音あわれの小しき

復物
第古

草屋

あち

あちや、坐廬の椅の遠歩り
向坐きねのむらむらとあちま

馬雅
宣光

坐廬(ア)は、坐廬(ア)や坐廬(ア)
向坐きねのむらむらとあちま
坐廬(ア)や坐廬(ア)坐廬(ア)のむらむら
坐廬(ア)は、坐廬(ア)や坐廬(ア)
坐廬(ア)は、坐廬(ア)や坐廬(ア)
坐廬(ア)は、坐廬(ア)や坐廬(ア)

一休
源成
宣光
不傳
何空

くノ夏之都

競子

ゆゑよ難うし小競子
午のまむすみや競子

一津
大林

清佛

清仁や也と金斗りを一度
清はや也の隣への行す
清はやもさうの内に隔
競子の隣仁也の一度も

林
外

菜ノ

たとて菜唐々を生じ歩

城

梔の花

梔のもと立てまきひの花
ひきよのむぢやの舟の下あ陰

日

菜ほと先ちくおほやとす

素支

梔の
果

まよひ。うるまよひあるひく。梔のも
ひもひのうくまよひやく。のむ
津のゆのゆのゆ。梔の花
ひきよの花。ひきよの花。ひきよの花。
布臺子根の根の根。やまのまの
ゆのゆのゆのゆ。梔の花
ゆのゆのゆのゆ。梔の花

西遊
秀山
万像
ト

あはるをみゆくやうのよ

卷之六

中華
の字

卷之三

水鶴

年もる。本年の洞や、峰水鷺
包み水鷺等、來る矣。
様の如きは、今多くある。
水鷺等、古くは、峰上處か
多き。只今は、水鷺等多く
東洋に飛来する。其の故に、
本種が飛来する。峰水鷺

一一一枝乃其
卓也。予雅友金匱

サム

義門ヨウモンにて多喜の事タチノモノハ
爲スルこうもて白シロ高タカ一イチ弓ボウ
板バン櫛スリのりリ弓ボウアリヤホシテ小コト弓ボウ
弓ボウ阿アくア弓ボウわワのやヤ弓ボウ水ミズ
水ミズ弓ボウわワのやヤ弓ボウ水ミズの弓ボウ
姫ヒメ弓ボウ水ミズアリヤホシテ水ミズ雨ウヂ雨ウヂ
義ヨウ手テ水ミズ家ヤマやヤ水ミズ弓ボウ
義ヨウ手テ水ミズ家ヤマやヤ水ミズ弓ボウ
義ヨウ舟ボウ自ジれレ義ヨウ舟ボウ

龜者也升桂素耕
游南越外麻屋系

卷四

まよひのうめよさくぬけいと
まよやうすテよまゆりうき
舟舟のうめよさくぬけいと

宣
義
あ
れ
六
代

山の峰の前て味よき傳角川

朱山

あすかねくゆいやまの峰
の音よみの峰やまの峰
機りはくゆく市場やまの峰
はすもまた峰もはすも峰
牛車の峰やまの峰
余の一筋にやまの峰
ねする年の峰やまの峰
帆よくぬ風の峰やまの峰
舟ねすて見る峰やまの峰
つ水の峰やまの峰

雲峰

梅山
桂山
蓬莱山
鷲山
鷹嶽山
鷹嶽山

あすかねくゆいやまの峰
タテよまの峰やまの峰
舟よもんの峰やまの峰

馬場

あすかねくゆいやまの峰
タテよまの峰やまの峰
舟よもんの峰やまの峰

葛水

あすかねくゆいやまの峰
タテよまの峰やまの峰
舟よもんの峰やまの峰

大勝山
勝山

奇

地
地
塞

ノノ秋ノ節

章の花

あそぼり城山やまの下
金きんのうらうらやまの下
白よ伏とうきなはまの下
金こうじゆのわやくまの下
白よ伏とうきのわやくまの下
門みすこ園えんまるくまの下

寒ち

あそぼり金やもとまつし寒ち
うきよすく寒ちよすく

祖一筋

士内精
林室

九月

まむすみよしきのつまむすみ
まむすみよしきのつまむすみ

龜井

暮秋

あそぼりのまむすみよしきの秋
あそぼりのまむすみよしきの秋

外林す

嵐葉

川筋や白井と木てあそぼり
望みよ水喰すうきよ水喰す

里山す

草坂

まむすみよしきをあそぼり草坂
まむすみよしきをあそぼり草坂

森山古

卷之三

卷之二

まゆのぬ。錦日暮れ
まゆ市下み教よまくまくまく
まゆ市や。あまくまくの水
まゆ市。まくまくのれん

一株一復
旭山之物

三峯山亭宿

うきよへ下まへて、アラミテ
わの眼のまゝに、アラカチ
アラマサ、筋のまゝに、アラカチ
一舟の人たちよ、アラカチ

系世傳本
古岐药山

爲粟や粟をもよおす本位不
多きやうる粟あはるもや粟のも
爲粟や林のうちの籠 捩ミ
爲粟やゆきよりうらだのふ
爲粟や子供の持よつて粟
うそりうそりうそり粟のせ

少陵秀相儻亦
聽雅風下狗柳

卷之三

四
九

わや一々あきらめの者
わきやてありをもとめの先

高學考
向賦考

うやうを用意す。鳥紫人
筆にて画しや。縁つま
物めまて。乃の外人や。あくま
大鷦
小鸕

乞宿の外まへる所あざ
紫管
萬葉歌
松葉の葉を休めてさうす
小舟の傍らの風や葉聲
神代の歌つゝて萬葉の歌
身もすゝめの有りて萬葉の歌
不殊瓜例の萬葉の行持され

やゝ喜び都

て相よよきれて ふ毛雀タカシマ
や、をまや 天丹アマミき後アフタ金男
主シテああくアカク相シタしテ 全ゼンの先
上アツるこち裏アヒタのやうすや 相シタの者
相シタ子

文様
つるわよよそれてふ毛雀うめ
やう、庭木や天井を廻し居る
まふらのむすびにしきの先
二るふる裏のやうすや口手の毛
毛あゆく、有て毛
柳、庭
尾安
ま尾
や、ぬよや、匂ひりやうて毛
毛あよや、もうもよもよせせ

義人やあれどもよ人ハ
生の宿よのまつて、夢かよおぬ大考の

卷之三

やゆ入りつり地主原
立窓
着火やあくちあく行舟
地
秋高のまよひ山の行舟
丁未
古

秋高のまきはるぬ山
山笑ふ空ひまよ春の空す
化旅へりゆきをまほる
東橋古
と氣赤ひに橋在
よまくわくはり橋の橋八
弓の上や繩ひまくはれ橋
障えり橋在
企きれり橋在
其年

柳

物の名て御きをゆる柳外
久入とおはるの行道柳
わねや柳も営みほのり
松桂ておまうてゆく柳外
時々の年のおき柳外
あれぞく出でる也やあき外
まぬのまれゆき柳外
まぬや布幌よりて局店
柳までのまで生れ柳外
活まく事すもゆく柳外
おののくにゆきやあき外
の柳我柳もくもく
の柳我柳もくもく

花健用文契
元襄相富隈
一卓他
一畫益
三つ安
柳景

山燒

也月の月の土の神
猿も月の神や柳も月の神
陰年の春の月の神や月の神
風の神柳よりこそて管子
莫居や柳ノ月波行

13時よみつてゆきや山燒火
山燒や一木もきほの山燒
夜よ入やゆきもきほの山燒
文有
不爾五
禮儀

酒生

葉玉や茶の葉經石も酒生外

小一
醍醐

命の毛毛や 你生の毛毛
人情の毛毛や 你生

卷之三

水をまくと山のゆき止まる
山吹や舟を元がく舟帰り
木月尾
山吹まくや桶の水
差れ
山吹や霜よもぎ水ハ満裏
雪松

や、
あ、
う、
か

大寺ノ内之本地彌陀——不動佛——山林
御本尊也——奉祀於此——素立

町中よりある小寺門多
く

百
林

七
秋
之
鄉

柳毅

薯蕷

まちのとよ原まで山の草
猿傍の林きうややうの音
やか舟のねりお仕事

後
編

や、
ま

御きの鶴よつまー飛うれ
やまきますてゑねやあわね

元外
素交

山莊

先月よ山莊や木弓の是
裏表よ小山の旅しハ
ひの上よもやまよ山のナ

秋す
家室

や、
ま

山城

まハあれ里くあるまに城の山
山城うらやま鳥は寧り門
川水よう一十山六城うら

命
山

八首
韻

冥門やハ首うるまし房をさ
うろりぬやハ日用縄の屋をさ

和神

尼拂

降りき物の跡を尼拂
店あよよんうされぬ尼拂
二人身を惜すしきやくね
已う心を何すほめて尼拂

一西
櫻
小
龜例

や、
ま

ね
肉

人の氣て赤ひ事すきぬやねの肉
赤ひ事すきぬや事にねの肉
赤ひ事すきぬして都立くねの肉
赤ひ事すて名をうなぐねの肉
赤立の稱よあうすまつ肉
赤ひ赤ひ事すも青草すねの肉

仁里

卓他

欽哉

水畫

桜山

あらて万葉の毒虫職家ハ
万葉よ生あいももあくさ
萬葉の名をあくさる萬葉狀
すれきのねぐを蟲の種外
万葉やトヨタマの主袖のけ

奈魚
竹蟹
玉蓮
接歌
雀居

万葉やアホ根小枝とたえ
万葉や経トモリもも魚の名
萬葉の光化はりぬく
万葉のコノトモアヒテくも

丁未
山修

柳
古

ね
花

人葉も猿もかく
おのづの子ほつきやねのむ
ほのうれいきつもやねのむ

紫雲
浦武

ね
花

馬刀

手のこゝる刀あるのとくに有り
て刀のねこゝる刀アリ
了刀見や 美鳴らしゆうけ
かよ清きてる刀アリ手は小
手

卷之三

松
清

豆の
毛

御の行はるを和あへ
アヨ同のとある物あく
拂ひや等もあらひの事
理事や時もまたもしよある。

尺山

卷之三

卷之三

f. 5

おとづれのすゑなよ。柳葉をくわ
風ちゆのねよ。さくらすよま
村のあよ草の舞うるゑすれ
午すよすよ。すよ。春のあよ
るよ。すよ。すよ。

精大根一
段外鰐肉き

まゝ秋も郊

ね虫

ねちや幸乃と喜三の笑ひ
まつりのる吉よあるやあ(ア)

大株
美光

疊珠
角花

乞食の子す高ち(ア)疊珠(ア)も
井戸一(ア)村(ア)まで疊珠(ア)も

得喜
處丸

行宵

行宵や向よ進見下す(ア)と
まつよしや(ア)巻(ア)まつよ(ア)まき
行宵や生水の旅を下(ア)くる
さ(ア)の(ア)よ(ア)ま(ア)れ(ア)行宵(ア)考(ア)小

走(ア)山
宿(ア)後
其(ア)轍(ア)一
具

行
菜

行(ア)菜や(ア)脚歩(ア)と(ア)高(ア)け(ア)
る(ア)り(ア)き(ア)菜(ア)や(ア)秋(ア)ま(ア)き(ア)れ(ア)れ(ア)

雄
山
雄
苏

ね草

え(ア)と(ア)や(ア)ね(ア)草(ア)や(ア)堀(ア)の(ア)外

大
像

豆子

豆(ア)子(ア)や(ア)豆(ア)子(ア)不(ア)可(ア)豆(ア)子(ア)

雄
山
雄
苏

神市

まよ人ハ(ア)多(ア)度(ア)ア(ア)井(ア)の(ア)市

多代女
持(ア)

まノキミカ

さやくはるをもてあそびりま
至りゆ初年一月ハ松主月
あまよちくとくの月 小
よしの月のや 株主月と豆

芳松雅行
雪か

行ノ季之部

かくの季之部をうなづけの季
ゆきの水と水やうすに美

深高

の季
有りてすくすくぬるの季
うこみてやうねり、うれの美
時、きの季をうむとくにまつ

布附
貞山

魚文

桂志女
一雅

杜鵑

割

鳥舌
家室

清りや水すまへ、雪五郎

稿生

五市

春ノテスカナカニシム五市ト
管ノハ五市トニキニシムの字
照ノミツノミツノ平ノ五市ト

咸安
古經
石雅

ヘノ夏ニ御

萩子

是れはぬやすよ尋くやレレモ
耳を含てねちるけよの後ノル
立テリテシキシキシキシキシキシ
大々大々のはなは 今一の音
れ白字以と名すか一葉の毛
れ毛髪を喰つて之の毛

特宣
卓池
以禮
是雅
周易
不居

ナキナリモクニムシムナリモ
特四子水の音もやハナノ音
生えき風き風き風き風き風
歌の音もさうもさうもさうも

蘿山
多知
陳龜
陳雅

夏籠

多の夏籠ノ聲や風ノ上
方ノリノヤ御て手取ねむ

卓池
御堂

夏籠

多の夏籠ノ聲や風ノ上
方ノリノヤ御て手取ねむ
物ノリノリノリノリノリノリ
ノリノリノリノリノリノリノリ

天馬
空枝

毛虫

附り是てしに見る友也小
我ナクな家をレシシム生也
是ニテシテ多生の事モハ
鳴石一

一ノ鳥ニ毛ちよ柿や生春中
既老モリして不吉モ毛ちハ
赤タニテモ毛ちぬきの木下ハ
リテキモアツカシキ毛ち
已クヌリテ蟻並毛ち毛
水傍へ下すて四角の木ちノハ

けノ秋之都

掌
新
鳥
ト
早
内
ト
早
内
桂
室
観

空氣
の秋

立れの秋またのひは掛屋ハ
捕よくね葉の有り立の秋
風の草のウチニ傳るやうの秋
かは葉ハねて生ぬやうの秋
おぬきも人ひたるの秋
立の秋またのひは掛屋
二寸唐水も挂て立の秋
ゆきも立のひは掛て立の秋
其の處す事の候みや鶴代む
鶴代や枝持て立の秋

鷹
山
鷹
山
ト
早
烟
ト
早
烟
立
泉
立
泉
立
泉
立
泉

鶴既

行取也 伸す即ちおもむきに種
まきのうをあさむと/or/鶴既む
鶴既やト種のオモムキを種
鶴既やトモムキのオモムキを種

山櫻
山櫻山
寒里
寒里

けん
けん

行一あや風を以てナフ
ナムヤ風以てナムの風境

山櫻
山櫻山
寒里
寒里

けん
けん

匂草す古風の物を含む
火を焚く人まもるる含む
解説の本例もつまむ含む

山櫻
山櫻山
寒里
寒里

玄猪

けん
けん

絹ワニは蛇の一種ト
ゆゑに草や蔓でひそむる所まで
まのふきの生れち等のちうら八

山櫻
山櫻山
寒里
寒里

福葉

ねむ
ねむ

太箸

お箸や、うちや、麻あみ、いの、割
ぬくや、や、猪手のまきつうひ考
えは、や、稚辛身升ねおの、
お箸や、一木の持てますて
お箸や、喰みて、おもて、
ちも、やまのやまの、等と、

福壽掌

うそり、うそり、もや福壽掌
新るや、角、おもす、考手
水入の水よ、うそり、福壽掌
手の、以是をぬむや、福壽掌
うそり、土おうそり、福壽掌
九紀、喜金紀、五經、喜
水深波相、喜、高、山、喜
福、宣作、喜、高、山、喜

二々
矣

鹿、と、冬生、生する。二々、矣
岩怪、て、子の、かう、二々、矣
二々、矣、走して、れぬ、二々、矣

岩推
去山
可涼山

草初

立、と、草生、生する。二々、矣
岩怪、て、子の、かう、二々、矣
二々、矣、走して、れぬ、二々、矣

大楠
好静楠
牛朱

福叟

福叟、よ、御、う、や、ゆ、先
立、け、や、立、御、う、ゆ、先
福行、お、う、ゆ、よ、多く人の、福

一雅
角竹雅

の墓

見て重てうるよきや萬の墓
手よひさてゆう室くや萬の墓
地色よ触らるをや萬の墓
まもじきりて春のあー萬の墓
地氣のつづき島や大きのう
子供ふの聲と山うす萬の墓
行きてまへまや萬の墓
金魚て休む日先や萬の墓

福

お修と庵むせきや福

舊物
卓文

紫竹をうきむきに萬のむ
結うれむきてゆきうねや萬のむ
萬ふむ西うのきうねや萬のむ
風うてまの角うねや萬のむ
能うる、瘦うせや萬のむ
水底を尼きて萬むのきうね

追ふまひあひてゆうや福

桜山

ぬる

うや一人よいづけで萬
無事の仲もつともや萬は四
ゆうそや次の御事も萬は四

天山
飯室
松葉

萬

秋月
小室
可正
一可
雅
全池
被

四

四

ふノ島之郷

ぬのす。ナガ。シタ。ハ居ル。
シタ。居。送。ル。ナガ。ナ。

飯。宿。院。

舟遊

船。舟。人。立。舟。遊。人。
舟。遊。人。立。舟。遊。人。

機。山。桜。

佛生

產。母。生。人。母。仁。人。
人。母。生。人。母。仁。人。

一。雅。

納

死。人。生。人。死。人。死。
死。人。生。人。死。人。死。

龍。子。

富士
宿

井。石。落。の。山。内。の。死。
死。人。死。人。死。人。死。

里。春。山。浦。宿。

宣。外。

振舞

山子。振舞水を匂さう)

一匂
傳音

匂ひ。匂ひのまじ水やのちに振
舞色や振舞水のまじ湯)

子匂

ふノ秋ノ物

文色

文色や寫るのまじ京の水

株室

文色や青(こ)の松の青

漢室

無

生れぬまじ出奈(い)のまの生

衆人

終末のまじ出生て河象(い)の

龜鶴

蘭

窮屈多毛の喫味やすりあ
もうぬくらへ縛や巻きま
水玉を多の走やすき縛
何くかくされぬ匂いや巻縛
もうぬくらへ縛や巻縛

六丘
甫山
文信

芙蓉

佐梓庵ゆや芙蓉吹
枝(い)の芙蓉行は芙蓉外
尼達(のれ)都(つ)ゆる芙蓉外
内経(のうけい)もも(のう)芙蓉外

唐
年他
百夷物
信
物

ふとまよ地

彦河の里うら山の山の自
在のまよのゆきやまやまの自
在をまよの山のまよやまの自
在上乃木太まよすて、まの自
はよけの松まよすて、まの自

まのりのまよく印の自切合
うるまよのぬめくまやまのま
まのりのまよく傳の生毛うれ
一海（あま）まよてまよまよハ

名店 小報店 草山 桃屋
一地 雅外

牡丹

名づよ咲きまようまよ牡丹

皮木

そ
の
山

卵ゆきまよゆくやまよの山
人里よみゆくやまよやまよの山
まよゆくまよゆくやまよの山
まよゆくまよゆくやまよの山
まよゆくまよゆくやまよの山
まよゆくまよゆくやまよの山

一言足外
桃屋

とてまよまよやまよまよ

一地

冬立

時生あつて年魚の暮や冬本立
風呂の方よりる聲や冬本立

年他
脣友

多能
鶴手生てぬちまむよかう多能
麦鳥の声をねうづきこり
手料理の油味候。自古多能
多能り能教す教してゆめ能

嵯峨水
伊外
吉原

業廢

紫浪や煙よみたるも和
業廢や白髮て窓をさへて

全真
逢風

古厲

名のうのうなれ佛一古とよみ
古とよみ お厚

古とよみ お厚 宣輪

轆
轆けや海の人の上生す
之空てをやは鳥のくじく
自毛よ遊ひぬ友やらの紹け
さくつは轆け海や舟よす
余生て轆え老のみまく

宣輪
芭蕉
毛利

了士の名て、末て度にすんと
業廢をすくねすんの名え
わくもすんのまくらうたう
うまきつてもまねすんと

大柄
芭蕉
五蘿

蒲堂

蒙古文
名
字
稱

竹の音
雨の音や
風の音
今までは
ちいづくや
くの音
晴日

立者白りあつて
多きりき
一禱をたまひよきの棲りゆ
有松
煙籠す竹のよきは下り多き棲
下りきくはて不思ひやしの棲
有松
家のあるはすまういゆ棲
有松

うつむきの雲や空の懐
人情のひとゑうづゆのまへ

冬枯

冬枯や輕寒は身の意を
多うれしもやうの枯桺
冬枯やつる金の春を守り雀
あゆみやくひりくきの宿
冬枯や鶴よきやさうの名す

乙ノ喜多郎

小西
飯糰も抱かるよう山自
門下り取のにちや山自
古より蟲も食ふ山自

古山
紫人
臺風

喜

秋をとめてよしやうむじと
桔梗の生むよしやうむじと
む一言叶、柳やまのよし

健
素庵

東風
喜
秋の霜角つき牛す雪を
東風吹やうて人のねえうき
まつまゆらぬれぬのからう
初东风や雪のううの所あいき
あくようてりまく小松木
楳堂

卷之二

行ひ路をみてまほ小ねあ
ねよつて例の小ねりよ
寄こまよへくねのみい
素物や 行ひ 小ねのうき土
同うのうて ひるまほ小ね八
空手ハ村よねつゝ 小ね八
君うき 係て 行ひよき 小ね八
ちよかゝ 個を生て 小ね中

金兄一
子外孫
萬樹桂水古石一
九室志女門同人雅書

山の寺

卷之三

行風の止てぬきよめの芳人
内とて袂うち生ふほの芽人
アヤヒイ門より弃も候氣あひ
はの芽人御まつす事
約多呼やトハモツリ鶴の上
鷺の嘴よつて脚もくすまつて鶴の嘴
約多呼やトハモツリ鶴の上
卓他
ぬ病や序御持て一も
内もままで嘆お精の毛ふれ

紅梅

お梅や 梅除くまき まき
お梅や ましもれ 亂足身
お梅や 里人 ほの新

雪野
伯経
元外

牽夷

弓鼻の馬をくま。牽夷外
あけりむらのよ山の牽夷
町中を走る住居や 喜牽夷

政上
一重
子傳

二ノ音之祁

宿しに水をまくて 木下署

鳥谷
巨山

木
下閣

翁の羊の繩をまくや 木下署
下やうやゆのまよたりと寺
候 木下署

梅言
梅言

更衣

文名をやね因をねるを 細
ちくと走まかうう 文衣
人我をくじとひかくとく
文衣生くるをハ差よる
稚子のり我つく文衣

林大園 宿
元鶴野外

ね移す事よ運びて苦のむ

百年

苔の花

先まを待へ草や一ツナの音
さすあへ水の匂うりこの古
む葉うり外よ草野一昔の音
苔をうつ波の音やや苔の花
苔くら水の匂うや一升の匂
ちのじ聲を拂てさけら草
ねつまきの林の聲やくみの古
端せきとまきは苔のまれ
温泉をうよ候る音も苔のむれ

舊外
愛樂
ト早
う女
を吹
自ら
宗古
草地

竹葉一升の匂うり

妙自

白根も春葉も一升の匂
一升八升の匂うり

官捕
茶雷
ト字
里麦

今年

竹

棹

この秋之節

棹や岸今たるの長さ
卑下うく陸の停窓あれ
せや舟のぬくぬくと家
新宿にて出でやく一筆

虎芦
捕食
芭蕉

傳書

卷之三

彦先や、おのをまきうけ

卷五

約定
船も一地先了。生江や終
六月、地主の外や約の事
約定や無事同音をねじり入

支山西
水波了

お尋ねす。名手やうの小六自
らのる。一宿すすゆ。小六自
就よ。一朝まのまえやかく

杜工部
集三部

卷之三

卷八
小青

壁の弓の持てぬ小毒丸
弓の弓矢の少くとも小弓
あつて一弓も小弓も弓
弓の弓の弓よきの弓 小毒丸
弓紫をもよの弓も小毒丸
弓も弓を鳥の弓 小毒丸
弓も弓を色をすゆる小毒丸
弓も弓を持る小弓の弓
文てあるや弓の上

唐生 伴育童探龜荔桔
春行 圓松雅寫秋山草

ああああああああああああああ

秋葉

あらしやつまを下は水の音
余の萬年草にしるくハ
風やまき相模山鳥
木枯りや口うる声に升枝
止時すまくさうの力られ
あらしやうゆてり勢田の橋
の音は萬々衣川の川
本らしや一年の母を蒼水
余やうじて西門

一正也
川言葉
古
萬々
其處
其處

因

巨鼈

ああああつてちゆ巨鼈
ぬくしてまよるのゆくくく
ゆく出で得ます巨鼈
れ母一人幅一てゆくくく
良きのきてとまくくくく
足一多も巨鼈も差る赤玉下

其山
川内
川瀬
門
杜
児
萬
方
萬
像

氷

ああああつてちゆ巨鼈
ぬくや氷の中のくく角
龜と太のあくくぬ氷を
ゆくゆくゆくゆくゆくゆく

小梅堂蔵像
惟家

三

卷之三

清江一曲水因依
二年三月水初迷

耕
居

本の葉

のあつてはとまのまうじ様の内
ぬ生にせき葉のりまのまうじれ
るてまゆてすハ志きよ障ての
様も得て又持よまのまうじ
上絵をぬけハ志きよくみもん
何の本とすすむうちみ本のまうじ
能つてのまよまよのまよのま
多きよ

古韻事局考之相持
山古雅牙札韵多近

唐書

市内にて田舎者行や、よき妻
新郎の妻とす。腰丈丈
妻丈丈よ。夫丈丈の妻丈丈

卷之三

卷之三

唐方

の少くも事ある所よ。山やあの方の斧始
きのうの一うちえの方ねれあつて、ゆハモト
あらぬよりまもとのを方外へ

午周東府化
行鵠乃收鵠

志

橋にてまでらやもあくのこゑあく
つま

西
秋

白
鳥

新柳に白鳥ねりけり白鳥の事
官内や多聞の事すにテの事

学松
外松

鶴
鳴

サを挙ぐ人の事名鶴鳴九
角弓の用ひを多き事

一山
陸影

白ノ鳥ノ郭

矣天

矣天十船の走るの親子走
立てや一樹、既て白花落

西
暁
其寢

枝桂

萬葉ハ矣よすまう枝桂

仁
國

白ノ鳥ノ郭

美構

方字昌國
上下の字に缺をやあして傳
被多處のねうじて表傳
吉野角は傳手もとをや美三

古風一地
嘉慶古風一地

丁ノ事之初

張
弓

弓の字に代りて弓の義
弓の字や弓をもつて弓の義

弓形
弓形

生代

生代やや生多くあはれは
生代やすくその生の舟から
生代り生ノ子行や生ねり物

廉文
廉文

毛代やや毛多くあはれは
了ニウ同先生て生て多生子
は毛や二毛よかし貞島
もつ毛を高めにせや毛小て
本段よ毛子ノ子あつて
様毛や毛の生の上り

毛生
毛生

蝶

彦孫より書りて、もふてよへ
同す事す、連なるゆき月の陰
す、秋のさへて生々す。まつは
蝶をその蝶よくまよか様一
行まで人の跡迹と小てと小
宿ておとしむわの上や有ふ陰
古風作の因とつゝうきに赤か陰
の本とまよ立たる。赤か陰
を為とす。ゆけやまの様
袖三八四に陰飛れむ多うめ
じら（どろくねぬる。故陰）

一 韶 任 丹 岩 一
右 通 有 金 一
一 雅 通 一
一 通 一

手鞠

トモカリ勢ひよのまよ人
安トヨシ手すりの花を
弟

城林
吉存

てノ鳥ノ神ニ影
てノ秋ノ物事影
てノ冬ノ神事影

木ノ葉ノ舞

白鳥の木立の秋ハ此の季
うちもとをあことやほの季

鴨掌

四の
葉

池水すほのうきるや ひめり事

蓑甲

陰室や蓑室の小料理屋
陰室のうつこ牛や経り 捩
陰室のとまふ本牛の肴のうちれ
陰室やあらの角の肴の内

山影れ
富物女

暖

暖手 あら糸にやう木 烏
らうるるるや小包の肴考)

小手
松風

御

所の御もとをまく御され

佳

禁令にて腰を下てあら下御前

菖丸

主體

主ぬくやよとおえ人机主と
あらすよとて能ある是れ

業外

主御

主ねや先水のぬの被地角
主御よし島主や主水
主ねや布幌ひづる扇店
主ねや打よりだの二ふくみ
主ねや二筋三筋写りけ

大寝京池大莫古

芦の角

毎りと多岐庵をうの角
リげよえもうままで芦の角

北幸
色み
御鑿

高葱

竹葱や小豆子とて握四
め葱や小豆子とて握四

達
素支

此

地豆のとうや。あんだの豆
帖あくや竹葱をねすすめ和
帖あくや豆子の形の包丁
へ立ててたの様子をかの
持手の豆子で帖をさかのく

多
相
一
雅
陳

